

お父さんのたいこ

常総市立豊岡小学校 三年 鶴つる 見み 尚なお 大ひろ

細野の近くでは、毎年八月二十四日と二十五日におまつりがあります。じんじやの前で子どもずもうをしたり、ぼんおどりをしたりします。子どもずもうに出ると、花火やおかしがもらえます。ほかにもえんぴつやいろいろもらえます。だから楽しみをしています。

でも、ぼくよりも、お父さんのほうが、おまつりを楽しみにしています。なぜなら、きよ年から、おまつりのたいこをたくようになつたからです。お父さんは、下館というところで生まれたので、細野のおまつりのことはよくわからなかつたそうです。でも、ぼくたちが子どもずもうに出たり、お母さんがぼんおどりをおどつたりするのを見て、とてもいいなと思つたみたいです。だから、おまつりのたいこのなかに入れてもらいました。

でも、きよ年のお父さんのたいこは、あまりじょうずではありませんでした。きいてみると、なんだかドキドキしました。でも今年がんばりました。おまつりの前には、じんじやで毎日、みんなとれん習をしました。指のかわがむけるまでがんばりました。

おまつりの日、子どもずもうがおわり、ぼんおどりが始ま

りました。たいこも始まりました。お父さんがたたきました。きよ年よりじょうずでした。おどっている人が、

「たいこ、がんばれ。」

と、声をかけました。なんだかうれしくなりました。みんなわらって楽しそうです。細野にこんなたくさんの人がいたことにもびっくりしました。

お父さんは、地くのおじいさんから、はつぴをもらつてもうれしそうです。お友だちもふえて、とてもうれしいと言っていました。ぼくも、大きくなつたら、お父さんや地くの人にたいこやふえを教へてもらつておまつりをもりあげたいと思ひました。

国民文化祭 がんばれコスモ・ス

石岡市立石岡小学校 六年 櫻さくら 井い 香か 澄すみ

私は去年、学校で配られたチラシに興味があいた。それは「国民文化祭・プレ演劇祭」の応募用紙だった。「森は生きている」全く知らない物語だったが、ダンス好きな私は、ダンスがあると聞いてすぐ応募した。

オーディションはみごとに合格。「そうだ。」と思い、図書館で「森は生きている」の本を借りて読んだ。その内容は、両親がいない二人の少女のロシアでの冬の物語だった。自然、友情すべてがそろっている感動的な物語。私はこの話が大好きになった。

去年のプレ演劇祭はぶじに成功。この時、私は「来年もこ

のすてきな舞台をやりたい。」と思い、今年もやることにした。今年はワークシヨップからはじまった。おにごっこ、発声、つなわたり、舞台の勉強をした。「これも、演劇をやるには大切な事。」と先生はおっしゃっていた。ワークシヨップの中で「オズの魔法使い」の一部分をやることになった。私はドロシーをやることにした。これは、キャスティングオーディションでしんさの一部としてみられた。また、台本の中のワンシーンを何人かで読んでみた。

数日後、キャスティング発表があった。私の役は二人の少女の一人、けなげに生きる「みなしご」という役だった。ちなみに、もう一人はわがままな女王様だ。かけはなれた二人だが、一番最後のシーンではみんなに見守られながら「友達」となるのだ。

今年は宣伝のため、テレビに出たり、いろいろいそがしい。「演劇クルーコスモ・ス」というかっこいい劇団名もついた。今度、Tシャツもつくるらしい。

せんでんに力を入れている中で、練習にも力が入っている。七月からはじまり、八月には立ち上げいこ、九月には台本をはずしてむりやり通しをし、合宿もあるらしい。私は家でも台本読みの練習をよくしている。「すてきな舞台をみんなで作りたい。」から、私はがんばっている。

出演者として、主役として、私にはもつと大変なことや努力しなければならぬことはたくさんあると思う。でもそれをのりこえて、コスモ・スのみんなといっしょにすばらしい舞台を完成させたいと、私は思う。

常陸と出雲の不思議な関係

つくば市立吾妻中学校 一年 内藤 潤

僕は以前、何かの本で、現存する風土記は、常陸、出雲、播磨、肥前、豊後のもので、全国でも五つだけだと読んだことがあった。

この五つの地名を見ると東日本は常陸だけである。このような貴重な風土記が住んでいる地域に現存していることに感動し、いつか調べてみたいと思った。

少し調べるうちに、残された風土記は、播磨や、また、やまたのおろち退治やいなばの白兔など僕達もよく知っている数々の神話で有名な出雲の風土記さえ単なる地理書のような内容だそうだが、常陸風土記は歴史的な内容も記され、他とは対照的なものであることがわかった。

更に驚いたことには、前述のように神話で知られる出雲国から来住してきた出雲系の氏族が常陸国を開拓したということだった。このつくり話と考えるような話の展開に僕はびっくりして、出雲の文化や神話がこの地域にどのような影響力を持っているかとても気になり、調べてみることにした。

出雲系氏族は、大和政権の勢力拡大に伴い、五世紀の初めに大集団で常陸地方に移住してきたらしい。現在の筑西、桜川市付近を拠点として新治国を開拓したと言われている。

古代の開拓とは、農地を造成していくことを指し、その手始めとして、井戸を掘ることが重要であった。新治という地名も、新井治（新しい井戸を治る）に由来しているという。

常陸国という名の由来も、この井戸の話と関連している。それは、倭武天皇が新治国を通った時、初代開拓者で、出雲系氏族の比奈良珠命に命じて井戸を掘らせたところ、天皇は喜び、その水で手を洗おうとしたら、衣の袖が垂れて、濡れてしまった。袖をひたしたことから「ひたちの国」と呼ばれるようになったそうだ。

もう一ヶ所、気になる記述が見つかった。それは、大神の駅屋について記されている部分だった。大神とは、大蛇を指すといわれる。現在地という大郷戸説が有力だが、稲田という説もある。これは、稲田神社の祭神が大蛇である「やまたのおろち」に関係があるクシナダ姫とスサノヲの命であることから稲田説がでてきたらしい。

それにしても、この辺り一带には、蛇に関する地名やいわれなどが多くある。それは、この辺りは昔から蛇が多く、その蛇を退治することで、その霊をしずめるために神社で祭られたといわれているが、僕には出雲文化との関連で考えた方がぴったりくるように思える。蛇は出雲地方においては、特に「神」としてあがめられ、信仰されていたらしい。これが、この地方にも定着したことで、蛇を祭る神社が数多く見られるのではないのだろうか、と考えられる。

もう一点、この地域には古墳が多くあり、特に、狐塚古墳（現在の桜川市にあり比奈良珠命の墓と伝えられている）は、一般的な前方後円墳ではなく、出雲地方の典型的な様式である前方後方墳であることから、出雲国の影響力の強さが見てとれる。

このように、遠く離れた出雲地方と、この「ひたち」の国

が、古代において深いつながりを持っていたことに驚き、感動した。これからも調べ続けてみたいと思った。

国際県、I BARAKI

県立下妻第一高等学校 一年 芦ヶ谷 真里奈

祖父母のいる茨城へ引越して早十一年：不便さを挙げたらきりが無いこの県：まわりに田んぼしかない、遊ぶ施設も少ない、だいたい人があまりいない。それでも！私は都会的な場所へ行く度、茨城を思う度、「やっぱり茨城が好きだ」と感じます。それは、中学生の時に参加したある大会のおかげだと思えます。その大会で私は、「茨城って凄い！」と感心し、改めて茨城について考えさせられました。

「インタラクティブ イングリッシュ フォーラム」略して「インタラ」。茨城県民のための、茨城県だけしか行っていない大会です。名前だけではどのような大会かわかりにくいので説明します。インタラに参加できるのは茨城県の中学校二・三年生と高校生です。そして一グループ三人で名前の通り英語で五分間出された題について話すというものです。私は中学二年生の時に先生に薦められ、この大会に参加し始めました。もともと、私の通っていた中学校はこの大会で良い成績を納めていた先輩が多かったらしく、先生も意欲的にインタラの指導をして下さいました。私は、いつもと違う言語で色々な人と話すことがとても新鮮で、どんどん練習にのめり込んでいきました。

インタラに参加できて本当によかったと思えたことがいくつかあります。まず、凄くたくさんの方に出会えたということです。普通に中学校生活を過ごしていたら絶対に知りえなかったような人々。すごく頭が良い子、同じ趣味の子、個性があつてユニークな子。私は今でもその時の友達と遊んだり、メールをしたりと交流があります。次に、前に述べたように自分の住んでいる地域についてよく考える機会を与えてくれたことです。中学三年生の時のトピックに、「都会と田舎のどちらがいいか」というのがありました。私は必死に田舎っぼい茨城の良い点と悪い点を考えました。「田舎と聞くとな不便なイメージが強いかもしれない。でも、そこには古くから伝わる方言や伝統、そしてたくさんの方が自然があるのでないか。私はそれらが大好きだし、その文化を大切にしていきたい。」そう考え、田舎派で話をする側になりました。また、トピックに「自分の町」というのもありました。自分の町はどんな行事があつてこんな特色があるのだと話すために、たくさん調べたりしました。私はこのときほど、自分の住んでいる茨城、加えて市町村について考えたことはなかっただろうと思います。実際に大会で色々な地域の中学生と話す、様々な意見や地域の特徴を知ることができました。都会か田舎の話では、「私の町は電車が通らないから都会に憧れる」とか「若いうちは都会へ行つて年老いたらまた茨城に住みたい」などの意見が出ており、一方自分の町の話では行事が楽しい、公共施設が良いなどの町自慢も聞きました。このような会話の中で、茨城がもっと好きになり、また新たな視点から県を見れるようになった気がしました。

英会話の面でもインタラは本当になりました。始めたばかりは相手が何を言っているかわからず、自分の話す英語にも自信がありませんでした。でも、練習を重ねていくうちに段々と自分の思ったことを英語で伝えることが楽しくなつていき、ついでに英語の授業も得意になれたのです。その上、大会でALTの先生方とも会話する機会が出来たのでナチュラルな発音、外国の文化を学ぶ良いきっかけにもなりました。

このように様々な人々に出会え、英語を好きにしてくれたインタラに参加できて私は本当に幸せ者だと思えました。そして茨城県民でよかった！と心の底から感じました。

茨城と言えば「田舎」だとか「納豆」だとか、そんなイメージで終わつている人も多いと思います。ですがインタラのような国際的な大会を開いている凄く進んでいる県なのだということをこの文化を大切に積み重ねていくことでもっともっとたくさんの方が知り、「国際県・茨城」が広まってくれることを願っています。